



## 目次

対話による教育を徹底する	1
2021年度新任教員の紹介	2
コロナ禍でのGLC学生の取り組み	2
文学部～この1年～	3～6
総合人間学科／歴史学科	
文学科／コミュニケーション情報学科	
2021年度の教務委員会について	7
2021年度の学生支援委員会の活動について	7
2021年度オープンキャンパス報告	7
留学体験記	7
インターンシップに参加して	7
漱石・八雲教育研究センター活動報告	8
永青文庫研究センター活動報告	8
2021年度熊本大学文学会活動報告	8

## 対話による教育を徹底する

文学部長 水元 豊文

n×nにする。密な対話で自分の考えの創り方を学ぶ。それが大学で学ぶ意義だと思います。

文学部教育の特長は、少人数での対話による課題研究や卒業論文指導にあります。今後も学部の良き伝統を踏まえ、対話教育を徹底し、一人ひとりをしっかりと世話をする場にしていければと思います。



## 7人の新任教員の採用による更なる教育研究の充実

コロナは人文社会科学分野に限りませんが、研究にも多大な影響を与えています。必要不可欠な現地調査をしたくても、なかなかできない。研究者各々が様々な手立てを考え、動くしかないというのが実状ですが、そうした中でも、小畑弘己教授が『縄文時代の植物利用と家屋害虫一圧痕法のイノベーション』で第11回日本考古学協会賞大賞に選ばれるなど、着実に成果を生み出してもいます。

文学部では令和3年4月に7名の准教授を迎えました。全員、気鋭の研究者ですが、特に国際人文社会科学研究センター所属の久保田慎二准教授と下田健太郎准教授にはそれぞれ、新資料分析による歴史理論の再構築、水俣病関連資料を中心とする学際的研究資源アーカイブ作りで中心的な役割を期待しています。また、日高利泰准教授と山部順治准教授には、令和4年10月の国際マンガ学教育研究センターの設置、令和5年4月の現代文化資源学の大学院新コースの開設に向け、学内手続きを鋭意進めさせていただいている。さらに、来年度は民俗学と英語圏文化論の2名の教員を採用するとともに、令和6年度からの大学院に公認心理師コース設置を含め、教育研究の更なる充実を図る所存です。

今後とも研究力を強化するとともに、魅力ある教育の提供に努めてまいりますので、ご支援とご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

### 所属(学科・コース／研究センター)

総合人間学科

文学科

コミュニケーション情報学科

国際人文社会科学研究センター

### 専門分野

氏名

地域社会学

吉武由彩

ドイツ文学

益敏郎

英語学

松本知子

マンガ学

日高利泰

言語学

山部順治

考古学

久保田慎二

文化人類学

下田健太郎



## 2021年度新任教員の紹介

### 吉武 由彩

総合人間学科地域科学コース

はじめまして。2021年4月に総合人間学科の地域社会学研究室に着任いたしました吉武由彩です。専門は地域社会学と福祉社会学です。ボランティア活動や献血・寄付・募金、地域福祉活動などのボランティア行為に関する研究を行っています。また、農村における高齢者の社会参加活動や生きがいの研究にも取り組んでいます。これから熊本大学でみなさまと一緒に学ぶことができる事を大変うれしく思っています。どうぞよろしくお願い申し上げます。



### 松本 知子

コミュニケーション情報学科

コミュニケーション情報学コース

はじめまして。2021年4月にコミュニケーション情報学科に着任しました松本知子です。専門は英語学と英語教育学です。英語の非定形節の構造や日本語の属格主語、効果的な文法指導法について研究しています。授業では、英語コミュニケーション論を担当し、日本語との比較のもと、ポラリテスや語彙・文法の英語らしさについて学生と一緒に探究しています。

出身地は熊本で、熊本大学は学部4年間を過ごした母校です。母校で仕事ができる喜びを日々感じています。未熟者ではありますが、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



### 山部 順治

コミュニケーション情報学科

現代文化資源学コース

初めまして、山部順治と申します。2021年4月に着任しました。出身は福岡市の姪浜、大学は東京とインド、前務校は岡山で、30数年ぶりに九州へ帰って来ました。言語学が専門で、インド東部のオリヤ語と日本語の方言について調べています。インドでは毎年聞き取り調査を行っています(今はコロナ禍明けまで一時待機中です)。授業では、学生とともに若者の方言を調査しています。毎週、伝統方言にはなかった珍しい文法事象を発見できて、これからも展開が楽しみです。



### 下田 健太郎

大学院人文社会科学研究部附属

国際人文社会科学研究センター

はじめまして。2021年4月に国際人文社会科学研究センターに着任した下田健太郎と申します。専門は文化人類学で、熊本県水俣市や沖縄県の石垣島を主なフィールドに、環境問題や人為的な災害に直面した人々と、その経験をどのように想起し、記憶として紡いできたのかという問題を、モノと語りのダイナミックな相互作用に注目しながら読み解いてきました。近年はその経験と記憶が、新たな社会秩序にいかに結びつき得るかという課題にも取り組んでいます。皆様と「フィールドで考える」ことの楽しさや臨場感を共有できたら嬉しいです。



### 益 敏郎

文学科多言語文化学コース

2021年4月に着任しました。専門はドイツ文学で、ロマン主義時代の詩や悲劇、哲学、美学を研究してきました。今後はさらに文化学研究や映画研究にも挑戦し、新設の国際文化学研究室を盛り立てていきたいと考えています。広島、京都、ベルリンで暮らしてきた私にとって熊本は新天地です。特色ある熊本の土地柄や歴史を日々新鮮に感じながら、研究、教育活動に専心努力していきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

### 日高 利泰

コミュニケーション情報学科

現代文化資源学コース

はじめまして。2021年4月、コミュニケーション情報学科現代文化資源学コースに着任しました日高利泰です。専門はマンガ研究で、とくに戦後の少女マンガの歴史を中心に研究しています。出身は鹿児島なので、15年ぶりに九州へ帰ってきた格好です。

熊本大学文学部では、2022年4月に国際マンガ学教育研究センターが設置され、翌23年4月からは大学院社会文化科学教育部にも現代文化資源学コースが開設される予定です。新しい研究領域を発展させて、大学全体の魅力向上にも貢献できるように頑張ります。



### 久保田 慎二

大学院人文社会科学研究部附属

国際人文社会科学研究センター

2021年4月から国際人文社会科学研究センターの新資料学・歴史理論領域に着任した久保田慎二です。これまで中国や東アジアの考古学を研究していましたが、今は特に食文化に興味を持っています。過去の食文化を復元するためには色々な角度からのアプローチが必要ですので、考古学の枠にとどまらない活動をしていきたいと思っています。熊本に来る前は関東や北陸が研究の拠点でしたが、九州にはおいしいものが沢山あっていいですね。食文化研究にはもってこいの環境ですので、伝統的な食習慣や珍しい料理があったら是非教えてください。



## コロナ禍でのGLC学生の取り組み

### 文学部GLC学生メンター教員 平野 順也

TOEICの指導を依頼してきました。色々な理由を挙げて断ろうと考えていた私も、彼女達の真摯な態度に心を打たれ協力を約束しました。勉強会では「チョコレートが食べたい」、「お腹が減った」と言うものの、彼女たちの真剣な姿勢が崩れたことは決してありません。勉強会は他の学生も参加するほどの規模になりました。世界情勢がどうであれ、グローバルリーダーコースで学ぶ彼女達は確実に「リーダー」として困難に立ち向かう能力を身に付けています。



## 総合人間学科

### 哲学

#### 南 桃菜さん（4年）



私は、現在哲学研究室に所属しています。ここでは研究室の活動について紹介します。

ひとつは、週に2コマほど学生だけで自主的に講義の予習を取り組んでいます。講義の内容は、主にネーベルなどの哲学者の執筆した英語の論文を取り扱っています。学生が担当箇所の日本語訳または要約をレジュメにまとめ、それを基に論文を読み進めています。英語を日本語に訳すことはもちろんですが、内容を理解することも難しいと感じています。最初は講義についていくだけでも大変で正直不安でしたが、現在は分からぬ部分を教え合うことのできる仲間がいるので心強いです。学生同士の自主予習を始めてから、講義の内容についてより理解を深められるようになったことに自分で考える余裕も出来ました。また、時には学生同士で講義の内容について議論する場面もあります。

もうひとつが、卒業論文に関しての活動です。哲学研究室では、月に1回程度、研究発表会や大辻先生との面談があります。研究発表会では2回に1度、自分の研究内容を発表します。そこで他の学生や大辻先生からの質問や議論は、自分の考えを客観的に見直すことが出来るとても良い機会だと感じています。また、他の学生の研究発表を聞くことも出来るので、とても面白いです。そして、大辻先生との面談に関しては、先生がいつも親身になって話を聞いてくださるのでとても心強います。

### 芸術学

#### 松下 萌さん（4年）



芸術学研究室では個性豊かな仲間が集い、音楽や美術、ファッションなどそれぞれが興味を持った芸術について幅広く研究しています。演習では、シミュレーションズムに関するアーティストについて調べて発表を行ったり、コミュニティ音楽療法について学んできました。芸術に関する知識や経験がなくても、親身になって指導して下さる先生と共に、自由に意見を交わして楽しく学べることが芸術学研究室の魅力です。

私はゲームが持つ魅力について興味を持っており、中でもRPGを好んでいます。卒業論文では、大好きな「テイルズ オブ」シリーズについて、物語をナラトロジー的に考察したり、キャラクターの人格をユング心理学的に考えたりしています。長い歴史があるこのシリーズの魅力を、様々な視点から考えるのはとても面白いです。しかし、ゲームに関する専門の教授がない中、一から研究を進めるのは容易ではありません。それでも、それぞれのメンバーが関心のある分野について否定せず、自由に研究をさせていただけるところも、この研究室の大きな魅力です。他のメンバーは、漫画における音楽表現やロリータファッション、SNSマーケティングなどについて、ユニークな研究を行っています。

卒業後は大学生活で学んだ知識を活かし、エンタメコンテンツを研究する側ではなく作る側として、より一層努力していくと思います。

### 心理学

#### 仲井 郁穂さん（3年）



心理学とは人の心の動きや行動の仕方を明らかにする学問です。心理学が取り扱う分野は幅広く、生理心理学、社会心理学、臨床心理学など様々な分野に細分化されます。の中でも私たちが学んでいるのは認知心理学で、知覚や記憶などの認知活動に関わる心理過程を研究します。例えば、無意味綴りの言葉を複数提示した場合にいくつ記憶して思い出すことができるのか、というような課題を実験によって明らかにします。実験で得たデータを分析し、心の働きや行動の傾向を数値化して解説します。文系に属する学問でありながら、実験プログラム装置やエクセルを使用するため理系チックな能力と技術が求められますが、寺本先生と安村先生の丁寧なご指導のもと日々研究に励んでいます。

現在私たちは、認知心理学の英語論文を読んで知見を増やすとともに、得られた知識をもとに自分が行いたい実験を考案し、計画を立てて実験プログラミングの作成やデータの測定を行う実践的な学習をしています。研究テーマは視覚・注意・文字・感覚など多種多様で、自分の興味とあう研究テーマに必ず出会えますし、研究室のメンバーがどのような興味を持っているのかわかるのが面白いです。実験を1から構想して具現化し、仮説どおりの結果が得られた時には正真正銘の感動を得られます。

### 倫理学



#### 南川 瑠衣さん（3年）

倫理学とは、人間の行動の規範となる物事の道徳的な評価、つまり善と悪などについて理解しようとする学問です。倫理学履修モデルでは、規範倫理学・応用倫理学・メタ倫理学、さらに深層心理学と幅広い分野の内容を学ぶことができます。

私が所属している研究室のゼミでは、それぞれ興味があるテーマについて発表を行い、そのあと全員でディスカッションを行います。安楽死、反出生主義、幸福について考えるほか、環境倫理、スポーツ倫理なども取り扱います。それぞれ興味を持つているテーマが様々なので、多角的に物事を検討することができます。自分の選んだテーマについて全く違う観点からコメントをもらうことも非常に面白いですし、なにより、自分が今まで考えたこともなかった分野の問題について考えることは、新鮮でとても楽しいです！

私はLGBTsからフェミニズムまで、ジェンダーに関するものに幅広く興味を持っています。卒業論文の執筆に向けてひとつのテーマに絞り込むというのはまだまだこれからですが、自分が最も関心を持つ問題を見つけて、これから取り組むことができるといいなと思います。

### 社会学



#### 大坪 桃果さん（3年）

社会学は、私たちが生活している社会で起きる様々な現象や問題について焦点を当て、「あたりまえ」を問う学問です。自分があたりまえだと思っていたことでも、別のところでは全くそうではなかったり、自分の意志で決定したことだと思っていても、育ってきた環境や制度、秩序によってある程度定められていましたりするのです。先進国と呼ばれる日本においても格差や貧困は存在しており、見えない貧困とも言われます。くならないのはなぜでしょうか。ただ働かないから、収入が少ないからという理由ではなく、そこには複雑な社会背景があります。アプローチの仕方は様々ではありますが、あたりまえを疑い、深く深く追求することの面白さが社会学の魅力のひとつであると思います。また、社会学では社会で起きている事柄が研究対象になるので、さまざまなテーマを取り扱うことができます。今年度の社会調査実習では「大学不本意入学者の意識や経験等について」というテーマでインタビュー調査を行い、現在はインタビュー内容から学歴や学校の教育制度など、各々の関心のあるテーマで分析を行っていますし、ゼミの課題研究では貧困問題について研究を進めています。インタビューや文献からの情報収集はとても大変で難しいですが、社会学でしか経験できないことで、そこから身についた社会学的な視点が、今後の卒業論文、あるいはその後の人生においても生かせると思っています。

### 文化人類学



#### 水谷 はつのさん（3年）

文献研究やフィールドワークを通して、世界の「文化」の比較や研究を行うのが文化人類学です。私たちが普段何気なく接しているモノや、疑問を持たずに行なう行為などが比較・研究の対象になるので、私たちにとっての「当たり前」は当たり前ではないということに気付き、最近のキーワードである「多様性」を知ることが出来ます。このことが文化人類学を専攻する真髄です。私自身も、自分とは違う考え方を否定するのではなく、世間にそういう考え方もあるのだと思入れるようになりました。

ゼミは、課題図書を読んで、要約したレジュメを作ってzoom上で発表する授業と、興味のあるテーマに関する論文や書籍を資料にして、それらを見せながら発表する授業が開講されています。自分の発表に対するコメントーターを設けて、質問や感想を聞くことで、様々な考え方や新たな気付きを得ることが出来ますし、卒業論文を執筆するうえでとても役に立ちます。ゼミはテュルク系やモンゴル系、そしてアラブ系の学生が在籍し、グローバル化しているので、彼らの考え方や故郷の文化を知って比べることや、様々な系統のことばを聞いたりすることが面白いです。

学期終わりには、授業お疲れ様会と題してzoom飲み会も開催しています。新型コロナウイルスの影響でいつになるかは不透明ではありますが、対面でゼミの皆さんと、中東や中央アジアのエスニック料理を食べに行くことが出来る日を楽しみにしています。

### 地域社会学



#### 古賀 美有さん（3年）

地域社会学は、現実の地域社会が抱えている具体的な課題について取り組む学問です。地域社会学研究室では毎年、様々な地域にて調査実習に取り組んでいます。今年度は、阿蘇郡高森町の町誌の編纂に携わる機会を頂き、くらしや農林業について地域の方に聞き取り調査を行いました。私は、主に草原の利用方法や、かつて高森町の小学校で行なわれていたうさぎ追いについての調査を行いました。この実習を通して現場での調査の経験を積むことができたと考えています。ゼミでは文献を読み進めながら、様々なテーマについてのディスカッションを行っています。ゼミの中で扱う内容は、環境や福祉、農林業など地域社会に関すること全般で、幅広く学ぶことができました。また、親身になって指導して下さる心優しい牧野先生と吉武先生のもと、とても恵まれた環境で勉強することができています。

本研究室で学び、新たな人と出会いながら過ごしたこの一年間はとても有意義なものでした。研究室の個性的で面白い仲間たちから、たくさんの刺激を受けながら過ごせたことで、私自身大きく成長できたのではないかと考えています。来年度は調査実習やゼミで学んだことを活かし、卒業論文の制作に向けて尽力して参ります。

### 民俗学



#### 松本 愛洋さん（4年）

民俗学とは現在の人々が伝承あるいは保持している文化を対象とし、それらの変遷や成立の過程を探る学問です。そして、民俗学では実際に現地を歩き、人々の暮らしを見て様々な話を聞くことが基本だとされています。

民俗学を学ぶ学生たちも実際にフィールドに飛び込みながら民俗学を体験していくことになります。2年次の社会調査実習では調査計画立案から始まり、現地での聞き込み、報告書の作成まで学生たちが主体となって行います。

3、4年次では卒業論文執筆に向けて各々が自分の関心に合わせてテーマを設定し、実際にフィールドワークを行なながら研究を進め、ゼミでの発表を行なながら自分の研究をブラッシュアップしていきます。今年も研究テーマは幅広く、天草の焼酎や九州のお菓子、佐賀県のクリークや御朱印など様々です。

私は地元である岡山県の伝説を研究テーマに設定し、フィールドワークを行いました。行き詰まることもありましたが、先生のアドバイスやゼミ生からの質問などで新しい視点を得ることができました。自分の興味ある事柄に向き合い、現地で調査や議論を重ねることで多くのことを学ぶことができたと考えています。

### 地理学



#### 永秋 優さん（3年）

地理学とは、「なぜそこで現象が起きるのか」、「場所や地域による違いがなぜ生じるのか」、「地域の諸問題の原因は何か」などを考える学問です。研究室には、地図を見ることが好きな人や、街をぶらぶら歩くことが好きな人が集まっています。先輩方は、獣害の問題、宗教施設の役割、移住者、商店街の祭礼行事、被災地の災害公営住宅、日系多国籍企業、再開発地区、人口動向、陶磁器などのテーマで卒業論文に取り組まれています。このように、あらゆる視点から地域を見ることができるのが地理学の特徴です。また、地理学には、インタビュー、アンケート、資料やデータの分析など、様々な研究の方法があり、自分の得意・不得意から研究の方法を決めることができます。

この1年、私たちは、地理学の担当教員である鹿嶋先生と米島先生の時に優しく、時に厳しい指導のもと研究に励んでいます。授業では、GIS(地理情報システム)の使い方や地図の作成方法などを学びました。また、夏休みには、院生の方の聞き取り調査に同行する機会があり、大変貴重な経験をさせていただきました。ゼミでは、先輩方の卒業論文の研究の発表を聞いたり、自分たちの卒業論文の構想を発表したりしています。これからも体調に気を付けながら、学生生活を送りたいと思います。

## 歴史学科

### ■日本史学

2021年度は新2年生11名、新入院生2名を迎えて、総勢37名となりました。4月に開催した研究室ガイダンスでは、久しぶりに一堂に会して自己紹介などを行ないました。コロナ禍にあるため、恒例である新歓遠足や夏合宿、各種コンペもできず、Zoomミーティングが多くなっているなか、貴重な機会となりました。直接、顔を突き合わせて話すことの大切さを再認識したのではないでしょか。

感染拡大に配慮しながら実施した歴史資料学野外実習では、熊本大学周辺のフィールドワークを行なうことができ、3年生と大学院生、そして差し入れに来てくれた4年生とのコミュニケーションが図れました。また、卒業論文構想発表会や中間発表会は対面で開催することができましたが、これまでと比べると接触機会が少なく、「繋がり」の希薄さを懸念しています。変化を余儀なくされたことが多いなか、これまでと変わらない活動もあります。実習の成果である「古文書実習報告書」の刊行は17号を数え、先輩たちから引き継いできたものになります。淘汰された行事などがある一方で、残り続ける活動があることを、歴史学に携わる学生として認識してもらえばと思います。

歴史学は過去との対話でもあります。まさにコロナ禍は、我々に変化を提起し、今後あるべき姿を問っています。一人ひとりがコロナ社会と向き合って、新しい形の「繋がり」を築いてもらえばと思います。



▲フィールドワークの風景

### ■考古学

2021年度の学生は、2年生5名、3年生7名、4年生8名、大学院博士3年生1名の総勢21名です。学年別内訳をみてお気づきになるように、とうとう大学院修士の学生がゼロになってしまいました。学部4年生で文化財行政職への就職を決める学生が多くなっていることがその1つの要因です。学生の将来にとって嬉しいことなのですが、大学にとっては、研究室運営のみならず、発掘調査や報告書作成作業の中心を担ってくれる大学院修士の学生が不在であることは、とても痛いことです。考古学調査・研究の面白さをもっとも感じられるのが大学院修士時代だとも思うので、将来の考古学界の発展にとっても憂慮すべきことなのかもしれません。でも、学部卒で文化財行政職へ就職するというロールモデルができつあり、この傾向はしばらく続くような気がします。4月、熊本大学大学院人文社会科学研究部附属国際人文社会科学研究センターのテニュアトラック准教授として久保田慎二先生が着任されました。中国・東アジア考古学が専門の新進気鋭の研究者です。今後、少しずつですが文学部における考古学教育にも携わっていただける予定です。なお、コロナ禍2年目の今年も、夏の発掘調査実習は通いで実施しました。対象としたのは黒髪町遺跡。熊本大学黒髪南キャンパス内の調査となりました。久保田先生には早速、その調査の指揮を執っていただきました。熊大考

古学に新しい風が吹き始めています。



▲黒髪町遺跡での発掘調査実習（2021年9月16日）

### ■アジア史学

令和3（2021）年度のアジア史研究室は、2年生3人、3年生2人、4年生3人、大学院生1人に加え、中国から来られた研究生1人の合計10人という構成でスタートいたしました。学生研究室の机の上には感染予防のためのアクリル板によるパーティションが設けられ、昨年までとは少し違う雰囲気です。また昨年同様、一度に研究室を使用できる人数に制限があるほか、多くの講義がリモートで行われたため、研究室の構成員全員が一度に顔を合わせることがなかなかできません。こうした様々な変化に直面しつつも、アジア史研究室の学生たちはそれに負けずに自らの研究を着実に進めています。

昨年に引き続きコロナ禍により、サマープログラムによる学生たちの安徽大学への訪問を行うことはできませんでした。自分の研究対象の地域を実地で見聞するという、外国史を学ぶ上での最大の醍醐味を学生たちに味わってもらえたかったことは大変残念です。しかし中国から来られた研究生が史料講読に参加し、日本人の漢文訓読法とは全く異なる読み解法を示してくれたことは、学生たちにとって自分たちが普段読んでいる史料が外国語で書かれているという当たり前の事実を改めて感じ取れる、とてもいい機会になったように思われます。本来の日常生活を送れるようになるまでまだ少し時間がかかりそうですが、制限多き生活のなかにも学びの機会はあるのだということを教訓とし、今後も感染防止に努めて参ります。



▲パーティションが設けられた学生研究室での授業風景

### ■西洋史学

本年度も、コロナ禍の影響により、夏合宿や海外研修をはじめとする研究室恒例の行事を実施することはできませんでしたが、4月には、元気溢れる新2年生10名、そして後期博士課程の院生1名を迎えることができました（総勢33名！）。西洋史研究室の情報発信力は今年度も健在でした。大学院生の藤井太郎君は、5月にはアメリカ経済史学会で学会報告デビューを飾り、また12月には九州史学会で2度目の研究報告を行いました。4年生の最所七海さん、田中祥太君、森香蓮さんの3名は、11月に行われた九州西洋史学会若手部会において、それぞれの卒業論文の内容を中心とした研究報告を行い、熊大クオリティを思う存分發揮してくれました！4年間の学業の集大

成である卒業論文や3年生の課題研究の成果は、『西洋史研究室年報 第23号』（2022年3月刊）に綴られる予定です。また教員の側でも中川順子先生が、11月に、県内の高校の先生が集う熊本県高等学校教育研究会・地歴公民部会において、「移民と文化変容—食から考える世界史—」というタイトルで講演を行い、食文化という観点から世界史の魅力を発信しました。そして9月には、中世ヨーロッパ史の山田雅彦先生（京都女子大）をお迎えし、集中講義を開講することができました。貨幣史をテーマとした講義では、古文書などの文字史料から創られる歴史像を相対化し、貨幣という「モノ」を通じて歴史を新たに構築することの面白さを学ぶことができました。内向きになりがちな状況下で、今年度も熊大の垣根を越えた学びの場をもつことができたことは、研究室にとって本当に大きな糧となりました。



▲山田雅彦先生オンライン歓迎会の1コマ

### ■文化史学

2021年度は、新たに8人の2年生が研究室の仲間に加わりました。3年生11人、4年生13人、大学院生2人をあわせて学生34人。国外渡航が制限される状況下、毎年迎え入れていた留学生がひとりもいなくなっていましたが、それでも変わらずの大所帯です。

研究室の恒例行事もおおよそ中止となりましたが、韓国やドイツでの留学を終えて戻ってきた4年生と大学院生を中心に、少人数での顔合わせ会の連続開催や読書会の実施など、新2年生が先輩たちと速やかに打ち解けられるような工夫を凝らしました。学生同士で定めた課題研究のテーマは「表現」。茶道や歌舞伎といった伝統文化の変遷過程の探求、「九州男児」や「パンカラ風」に象徴される男らしさと「モダンガール」や「ロリータ」の装いにみられる女らしさとの比較、第二次大戦中に空から播かれた伝單（ビラ）と同じ空で散った特攻兵たちが残した手記の精読など、各自が設定したテーマを持ち寄って議論を重ね、そこで広め深めた識見を基にレポートを完成させました。

新井先生の演習テーマは昨年度に引き続いだカルチュラル・スタディーズ、鈴木先生の演習では福沢諭吉『男女交際論』を輪読しました。対面での会合がままならないなか、書名にちなんで男女のペアで資料調査をしましたが、先輩後輩や男女の別にとらわれない対等な共同参画がいかに難しいか思い知られつつ、同時にそれがいかに大切かについても考えさせられました。



▲世界システム史演習Eの準備風景（11月）

## 文学科

## ■日本語日本文学 三石 恵奈さん（3年）

日本語日本文学研究室には日本語学・古典文学・近現代文学の3分野があり、気になる方言や難解だけれども読んでいてワクワクする文学作品など、知識を深めながら楽しく研究することが出来ます。日本語学や日本文学と聞くと難しく感じてしまうかもしれません、身近な言葉や好きな文学作品をきっかけに自分の興味を広げていけるのがこの研究室の魅力です。

2021年も新型コロナウイルスの影響により対面での講義や仲間同士の交流はなかなか出来ませんでしたが、画面上で古典籍を一緒に見たり、考えや疑問をリアルタイムで共有したりするなど、オンラインならではの授業で充実した時間が過ごせました。また、春には大学周辺の文学碑や石仏などを巡る「熊大周辺文学散歩ツアー」などを先生方が企画してくださいました。勉強や研究の悩みはもちろんのこと、ちょっとした雑談や世間話にも応じてくださる優しい先生方です。

今後も世の中の状況によって授業やゼミのあり方が左右されてしまうかもしれません、研究室の仲間や先生方と一緒に楽しみながら研究を進めていきたいと思います。



▲課題研究Ⅰの授業風景

## ■中国語中国文学 丸山 爽さん（3年）

中国語中国文学研究室では、3人の先生方のもと、中国古典・近現代文学と現代中国政治や東アジア論などについて学んでいます。高校までの漢文や世界史を通して少しあなたに触れるこのなかで中国を幅広い視点から学び、自分が興味を持ったテーマをより深く研究することができます。

研究室の特徴としては、多数の留学生が在籍しており、彼らとの交流を通して異文化交流とネイティブの中国語に触れることができます。先生方を含め研究室全体で仲が良く、例年は火鍋会などで親睦を深めています。今年はワクチン普及により徐々に対面での授業が増え、オンライン飲み会などでも交流を深めています。

また、中国語圏への留学や学会訪問の機会もあり、普段の学びをさらに発展させることができます。異文化交流に興味のある人には最適の環境で、充実した学生生活を送ることができます。



▲Zoomと対面を併用した卒業論文発表会

## ■英語英米文学 蘭田 ラナさん（3年）

英語英米文学研究室では2名の先生方のご指導のもと、英米文学および英語学を中心化して自分が興味関心のある分野を深く学ぶことができます。本年度も昨年同様、感染症拡大予防のために多くの授業を遠隔にて受講する形となりました。オンラインの講義では、パワーポイントを用いた英語でのプレゼンテーションをする機会もあり、主体的・対話的な学習を取り組むことができました。他学年の方の発表から学ぶことも多く、先生方のアドバイ

スはわたしたちをより一層の作品理解に導いてくださいます。

講義で英語の文学作品に触れることで、舞台背景や作家の伝記的事実を知ることができ、英単語・英文法などの総合的な英語力の底上げにもつながりました。学科内での交流は例年に比べ少なくなってしまいましたが、コロナ禍を奇貨として捉えて、自主的な学習と主体的な研究に励んでいます。先生方のサポートを受け、何より学習を楽しみながら、充実した学生生活を送っています。



▲今年の対面授業の様子（2021年5月）

## ■独語独文学 藤田 麻衣さん（4年）

独語独文学研究室では、パウラー先生の授業はもちろんのこと、本年度文学科の国際文化学履修モデルに着任された益敏郎先生による「狂気モティーフから見るドイツ文学」「ビュヒナー『レント』を読む」や、名誉教授の荻野藏平先生による「ドイツ語を歴史的に見る」などの授業を通して、ドイツの文学・言語・文化に関する多様なテーマについて学ぶことができました。

また、2年ぶりに本学でドイツ語技能検定試験も実施され、独語独文学研究室の学生全員が受験しました。この通信が印刷される頃には結果が出ているかと思います。（どうかみんなよい成績でありますように！）

例年合宿で行う卒業論文中間発表会は、昨年に続き新型コロナウイルスの影響で学内の実施になりましたが、「魔笛」における善悪の転換」「ドイツの裸体主義文化について」「ドイツにおける粗悪語」に関する研究」というテーマで、各自の興味を掘り下げて取り組みました。



▲卒業論文中間発表会終了後、赤煉瓦（化学実験場）前にて

## ■仏語仏文学 濱田 湧壮さん（3年）

本研究室においては、仏語学や仏文学について専門的に学ぶとともに、その学びを通してフランスという国やそこに生きる人々の歴史や生活、考え方などへの理解を深めています。

コロナ禍の中で、今年度も対面での活動やフランスの方々と実際に交流する機会は十分ではなかったかもしれません、それを差し引いても、日本に生きる私たちに還元できる有意義な学びが得られたと思っています。

さて本年度は、仏語仏文学履修モデルに来年度進級する2年生も含め、計10名で勉学に励んでいます。特に4年生は、留学後に後期



▲「フランス現代演劇を読む」の授業風景

から復学した先輩を加え4名が卒業論文執筆に取りかかっており、私たち3年生もその背中を見ながらそれぞれの研究テーマを検討しているところです。また大きな変化としまして、濱田明先生が新設コースに御異動になりましたが、当履修モデルの御指導も引き続き受け持っていただけたところで、みなほっと胸をなでおろしています。今後も先生方の御指導を仰ぎつつ研究を進めていかなければと思っています。

## ■比較文学 進藤 景太さん（3年）

私が所属している比較文学研究室は、まさに「多様性の塊」といっても過言ではない場所です。その理由は所属している学生一人一人の興味の幅が非常に広く、学びたいテーマも十人十色だからです。日韓の文学比較を志す者や、映画などの映像作品に興味がある者、漫画やアニメーションに光を当てる者など、まさに千差万別です。

私はその多様性に惹かれてこの研究室を目指しました。自分自身が挑みたい研究テーマは国境や時代を超えるものであり、まさにこの場所でしかできない研究だと感じたのです。そして実際に研究室に所属し、そこで出会った仲間と交流する中で、今まで自分の中にはなかった視点や、新たな考え方をもたらされ、刺激をもらう毎日を過ごしています。ここに所属している限り、きっとこの先も退屈することはないでしょう。

多様な価値観と人間性に触れ、自分の世界を広げてくれる場所、それこそが比較文学研究室なのだと思います。



▲比較文学研究室の仲間たち（左右対称で）「対句」のよう

## ■言語学 朝倉 小日奈さん（4年）

鮮やかな紅葉が散り、熊本の厳しい冬がやってきました。私たち言語学研究室では4月から新たに山部先生をお迎えし、児玉先生とのご指導のもと4年生4名、院生2名、博士1名の計7名が日々研究を重ねています。

12月に入り、いよいよ卒業論文の執筆も佳境に差し掛かってきました。私たち4年生の研究対象はロシア語と鹿児島方言、またアラビア語やマレー語、さらに琉球方言と多岐に及び、内容も語彙から音声まで様々です。つい先日の卒論中間発表では研究内容や進捗状況を報告し、先生方からご指導いただきました。みんなの発表を聞くのはとても興味深く、執筆への良い刺激となっています。

このように卒業論文に追われる今日この頃ですが、私たち4年生は週に1回は研究室に自主的に集まり、感染症対策をしっかりと実施した上で和気藹々と研究を進めています。大学生活最後の冬も、研究室の仲間と楽しく乗り越えていきたいと思います。



▲卒業論文中間報告

## コミュニケーション情報学科

## ■全体の振り返り

4月、本学科に新しく4人の先生が加わりました。コミュニケーション情報学コースの松本知子先生(英語学・英語教育学)は、日々学ぶことを怠らないようにしたいと語っています。現代文化資源学コースには、3人の先生が赴任しました。下田健太郎先生(文化人類学)は、大学院人文社会科学研究部附属国際人文社会科学研究中心の所属(併任)で、真摯に仕事と向き合っていくつもりですとのことです。日高利泰先生(メディア史)は、教育研究に加え、文学部附属国際マンガ学教育研究センターの設立に向けてがんばりたいとの抱負です。山部順治先生(言語学)も、前述のセンター発足準備に参加し、言語学の知識と国内外での調査経験を活かして貢献したいと考えています。

コロナ禍が続き、長年「コミ情」の学生が地元百貨店と企画運営してきた活動も行えない1年でした。そういった中、3人の学生が夏から英国とアイルランドに留学しました。アメリカやオーストラリアを含め、これから留学に向けて取り組んでいる学生も8名います。実り多い留学になることを期待します。

## ■手探りながら結果につながった就職活動

今年度卒業予定の37名の就職内定率は90.3%(21年11月末)で、進学を含めた進路決定率は93.3%で、学科設置以来初めて7割台に落ち込んだ昨年度から大きく改善しました。単純比較はできませんが、文部科学省と厚生労働省による10月1日付けの調査での大学(学部)内定率71.2%を上回っています。

就職活動が始まる3年生の夏期休暇期間が新型コロナの影響を受けたことで、インターンシップが軒並みオンラインとなったことに加え、業界で申し合わせているスケジュールは形骸化し、先に述べたインターンシップなどで実質的な選考がおこなわれ、3年次に「内々定」を得るケースが増えてきました。学科としては、社会や組織文化への理解が進むインターンへの参加を推奨していますが、3年生後期という個々の研究テーマを探求する時期に、就職活動一辺倒にならないよう指導をしています。

他学科とは異なり本学科ではソフトウエアやシステム開発の仕事を選ぶ学生が多く、6名が情報通信系の企業に入社する予定です。コロナ禍でも業績が堅調で成長性を見込んだうえでの選択だと考えられます。一方、採用を大幅に減らしている金融については、公共系金融の採用が安

定していたこともあり、近年の内定人数を若干上回る5名を確保しました。

## ■「学びを止めるな」という共通認識

コミュニケーション情報学コースにおける今年度の教育活動は、正直なところ満足のいかないものでした。実社会の課題解決を目標とした「実習・演習型」の科目学習が満足にできなかつたこと、学生の意志で参加する公共や民間のプロジェクトのほとんどが中止になったため、実践的な学びがなかなか成立しませんでした。前期授業のほとんどがオンライン開講の状況でしたが、そういう状況でも教師はそれぞれ、オンラインでいかに従来の対面と同等もしくはそれ以上の学習効果をあげるために格闘してきました。

オンライン学習の課題は、授業が一方的な知識提供に陥ってしまいがちなことに加え、議論したり教え合ったりするような協働学習を想起しにくいことです。本学では以前からMoodle(ムードル)というシステムでWeb教材の開発・配布や学習状況の管理をおこなっていましたが、昨年以降Zoomの導入をおこない、リアルタイムで講義がおこなえる仕組みを整えました。

試行錯誤の中で私たちが見出したのは、事前設計の大切さと対面とは異なるコミュニケーションを学生との間に構築することです。私たちにとっては発見だったのですが、作り込まれた教材を用いて講義し適切なタイミングで個々に学習活動を促すことで、対面以上の効果を上げられることが分かつてきました。Zoomで講義をおこないながらMoodleによってアンケートや小テスト実施するなどです。学生の反応を確認し即時にフィードバックをおこなうのは従来の対面授業では不可能だったことです。

今後も、学生の学びを実質化する努力を続けていくことが、教員の使命と考えています。



▲数少ない対面授業（1年次 文章作成演習）

「くまもと歴史写真部」へ参加して  
松久保 安美さん(3年)

実習の一環として、熊本市職員の方の協力を得ながら、熊本の歴史的な文化資源をInstagramで発信する活動を行いました。これらの歴史文化の扱い手不足を解消し、何十年先も語り継いでいきたいという思いで始まり、まずは、若年層に熊本の文化資源に关心を持ってもらうことを目標に掲げました。

いざ取り組み始めると、熊本に住んでいたながらも知らないかった文化がたくさんあることに気付き、情報発信の重要性を再認識しました。同時に、身近にある文化の様々な歴史的背景を学び、人が繋いできたものの偉大さに圧倒されました。

また、歴史的建造物や伝統行事など、それらの本来の魅力をSNSで伝えるのは、予想以上に難しかったです。しかし、その中で、グループのメンバーと共に、実際に現地に出向いて撮影し、意見交換しながら投稿を作り上げていくのは、とても刺激的で貴重な経験でした。

自分たちが主体的に活動していく授業を通して、情報発信者としての責任と、正しくわかりやすく魅力的な情報を伝えるスキルを養うことができました。



▲フォローよろしくお願いします



## ■現代文化資源学コースのとりくみ

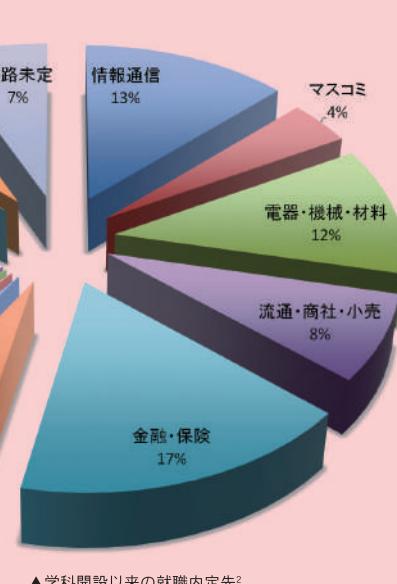
2019年4月に新設された現代文化資源学コースでは「新たな文化価値の創造」をキーワードに、伝統文化からマンガ・アニメ等のポップカルチャーまで、日本文化の新しい魅力をグローバルに発信できる人材の育成を目指しています。3年目である今年は、下田先生、日高先生、山部先生の3名と、2期生となる2年生9名を迎みました。1期生19名も3年生に進級し、「課題研究」と呼ばれる専門ゼミの授業も始まり、指導教員の下で各自の関心を深めて4年次の卒業論文に向けて研究テーマを絞り込むための準備が着々と進んでいます。

昨年度から引き続きマンガ刊本(雑誌・単行本)の収集、保存、活用にかかる「文化庁メディア芸術連携基盤等整備推進事業」へ当コースの教員、学生が従事しております。これと関連して2022年10月を目標に文学部附属国際マンガ学教育研究センターの設置準備が進行中です。

## (註釈)

1：10月から12月にかけて内定率は毎年10ポイント強アップするのが通常です。例年同様であれば、全国平均の12月の内定率は80%を超えると考えられます。

2：学科の前身であるコミュニケーション情報学コースの2007年度卒業以降の実績。進路把握の難しい留学生および3ヶ月期以外の卒業生を除いた就職者405名(本学大学院修了3名を含む)が対象。



# 2021年度の教務委員会について



文学部教務委員会は、正副委員長のほか各学科選出の4名の教務委員から構成されており、教務担当職員と連携して、教務全般の管理運営を行っています。

たとえば、学生は履修登録、単位修得、進学コース選択、卒業論文提出、身分異動など、様々な手続きを学務情報システムや教務担当事務を通して行いますが、本委員会ではこれらの手続きのために提出された各種書類について審議します。留学や休学など、学生の大学内外での修学の状況は多様化しており、個別に検討を要する案件が生じる場合もあります。本委員会では、学生の個別状況への配慮と規則の遵守との適正な両立を実現するために、それらの案件について時間をかけて議論を行なっています。また、学科選出委員が学科の学生・教員に対応する一方で、正副

## 文学部教務委員会 委員長 坂元 昌樹

委員長は全学の教務関係の会議に出席し、全学的な議論に参加します。

今年度は、昨年度同様に、新型コロナウイルス感染症流行下の学生への配慮を常に念頭に置きながら、各種の教務上の対応を進めました。また、今後の文学部共通科目的開講方針やグローバルリーダーコース運営のあり方などの事項についても、継続的に検討を行いました。さらに全学の検討依頼を受けて、学事暦の柔軟な運用(クオーター制)や履修科目の登録上限(CAP制)の導入などについても、各学科からの意見を聴取した上で、様々な角度からの議論を行いました。

このように文学部教務委員会は、全学的な動きに対応しつつ、文学部の教育が円滑に実施されるよう、一年を通じて教務全般の管理運営を担当しています。これからも、学生にとって大学生活が実り多い学びの場となるよう努めていきたいと考えています。

# 2021年度の学生支援委員会の活動について



文学部学生支援委員会は、学生生活全般の支援を目的とし、各学科から選出された委員4名と委員長により構成されています。その役割のひとつに、大学のキャリア支援課と連携して学生の皆さんの就職や進路を応援することができます。COVID-19の影響により昨年来就職活動は不確定要素の多いものとなっています。ただ、文学部の学生は、これまでにもバラエティに富んだ就職先を選んでおり、多様な選択肢があることは、この状況の中でも有利に作用する点もあるように思います。事実、全国的には就職率が低下するなか昨年度の文学部の就職率はこの数年と変わらないものでした。

目まぐるしく変化する社会の中で、一流企業であっても極めて厳しい

## 文学部学生支援委員会 委員長 寺本 渉

状況に立たされています。また、公務員ですら一生安泰ではありません。したがって、その時点での企業名や規模に囚われるのではなく、本当に自分にあった仕事に就くことが重要になっています。文学部では、これから的人生において自分の特性を生かし、充実した生活をおくるヒントを得てもらうために2年生向けの授業「キャリア支援」を開講しています。本年度は県内外の一般企業やNGOなどの様々な職業や立場の講師を招いてキャリアについて考える機会を得ました。

学生時代は、社会との関わりを意識しながら生活や学習の中で試行錯誤し、様々な知恵を身につけていく時期です。学生の自主性を尊重しながら、充実した人生への助走を応援するのが当委員会の役割だと考えています。

# 2021年度オープンキャンパス報告

今年度のオープンキャンパスは8月28日(土)に実施しました。コロナ禍のため、昨年度に続きウェブ会議サービス「Zoom」を用いたオンライン形式となりましたが、二度目ということで、前回より余裕を持って対応できるように思います。参加者も延べ人数(同じ人が異なる学科のミーティングに参加した場合、および午前・午後の両方に参加した場合はそれぞれでカウント)で372名と、昨年度よりも増加しました。高校生の皆さんからは多くの質問が寄せられ、文学部の学問や大学生生活の様子に高い関心を持っていただいていることを感じました。オンライン形式だと講義室や研究室の中を見ることや、教員や大学生と対面で話すことができない点は残念ですが、質疑応答の内容を参加

## 留学体験記

### ■コミュニケーション情報学科 桑原 真子さん(3年)

私は現在、イギリスのヨークシャー地方にあるリーズ大学に留学しています。トビタテ留学JAPAN12期生として、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、1年遅れての出発となりました。

リーズに来てから月日が経ちましたが、未だに落ち着いた感じはありません。しんどいな、と思うことの方が多いです。授業は想像以上にレベルが高く、課題で読まなくてはいけない資料が山ほどあります。自信を無くし、伝えたいことを声に出すの躊躇ってしまうことが多く、それが結構なストレスになります。しかし、その一方で、フラットメイトたちの優しさにとても助けられています。彼らは様々なバックグラウンドを持つユニークな人たちで、毎回みんなで集まるという大きいほど賑やかになり、ほっとすることも多いです。また、授業は大変ですが、私が学びたかったことをしっかり学んでいるので、とてもやりがいを感じています。毎度の授業で、私なりの発見があつたり、分からなかつたことが納得できるようになりますと、先生方が反応してくださいるのでとてもやる気が出ます。

まだ生活に馴染めていない感じがするのは否めませんが、私なりに楽しくやっているのではと思っています。ここまで応援しサポートしてくれた家族、友人、先生方、そして心の支えとなってくれた新たな仲間たちに感謝する日々です。残りの留学期間、やってみたいこと、行きたい場所、新しく見つけた趣味、無理せず楽しみたいと思います。



▲フラットメイトと手作り料理を食べている様子

## 広報・情報化推進委員会 委員長 松浦 雄介

者全員で共有しやすい点は、この形式の良さであるように思います。

また、これも昨年度と同様に、文学部の公式ウェブサイトに特設ページを設け、模擬授業や各学科・研究室の概要について紹介する動画を新たにアップロードしました。こちらも二度目ということで、昨年度よりもいくらか動画のクオリティが上がったように思います。これもコロナ禍によってもたらされた利点と言うべきでしょうか。受験生だけでなく、在学生(とくに1・2年生)の研究室選択などにも役立つため、この特設ページは当面公開を継続することにしています。いつでも、どなたでもご覧になれますので、皆様もぜひご覧ください。

## インターンシップに参加して

### ■文学科 西窓 優華さん(2年)

私は約1か月半の人吉学生復興インターンシップに参加しました。そのプロジェクトの内容は、水害で被災した人吉の観光を復興させるために「ウェルネス」をテーマにしたツアープランを作るというものでした。「ウェルネス」について理解することや、人吉の観光地をリストアップすることから始め、人吉の現地視察で観光地に足を運び、自分たちで実際に体験したり地元の方にお話を伺ったりしました。人吉のことや「ウェルネス」について理解を深めながら、何度も話し合いを繰り返し、最終的には3つのツアープランを完成させることができました。私がこのインターンシップに参加してよかったと思うことは2つあります。1つ目はとにかく楽しかったということです。まず社会人のように働くということが新鮮でしたし、インターンシップに参加したことで人脈も広がりました。また、現地視察では人吉を大いに満喫し、人々の温かさに沢山触れることができました。2つ目は成長できたことです。この活動では私たち学生に全ての仕事を任せもらいました。そのため、どのように仕事を進めていくかという計画力や、トラブルが起きた時の対応力が身に付いたと思います。また、働くことの大変さや社会人としての礼儀作法も学ぶことができました。新しいことに何か挑戦したり行動に移したりすることには不安が伴いますが、何事もやってみないとわからないし、先に進めないと改めて思いました。



▲球磨川でツアー内容を体験している様子

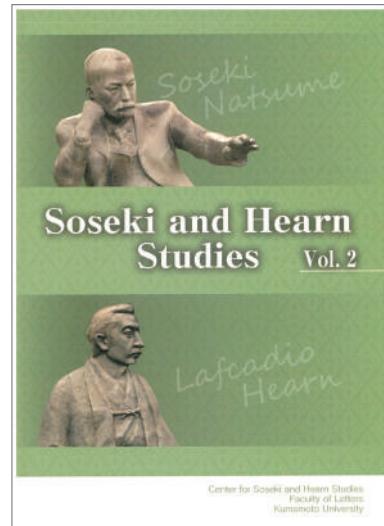
## 漱石・八雲教育研究センター活動報告

漱石・八雲教育研究センター兼務教員 坂元 昌樹

漱石・八雲教育研究センターは、2017年12月に設置された新しい文学部附属センターです。熊本大学の前身である第五高等学校ゆかりの夏目漱石と小泉八雲について、本学教員がセンター兼務教員として共同研究を行い、それらの研究成果の定期的な発信を通して、地域の文化振興に貢献するとともに人材育成に寄与することを目的としています。

本センターでは、2020年に定期刊行雑誌として欧文雑誌 Soseki and Hearn Studies を創刊し、2021年春には同雑誌のVol.2を刊行しました。今後とも、センター教員による教育研究活動の対外的発信を目指して刊行継続する予定です。本年度の研究活動としては、2021年9月19日(日)に第3回公開研究フォーラム「漱石・ハーン研究の新地平—異界と境界」を開催し、本センター教員による研究発表とともに、本学文学部の元教員で立命館大学大学院特任教授の西成彦先生をお招きして講演企画「ラフカディオ・ハーンと浦島太郎」を実施しました。新型コロナウイルス感染拡大の影響により対面・オンラインによるハイブリッド形式での開催となりましたが、出席者による活発な討議が展開され、充実したフォーラムとなりました。また地域連携活動としては、本センター教員が講師を務めて、NPO法人くまもと漱石文化振興会と共同企画の講演会を昨年度に引き続いて実施しました。同企画は今後とも継続の予定です。

なお、本センターでは、センターの公式ウェブサイトで情報を公開中です。本センターの活動をご観心をお持ちいただけましたら、ご覧いただければ幸いです。



▲センター定期刊行誌  
Soseki and Hearn Studies Vol.2

## 2021年度 熊本大学文学会活動報告



2021年度 文学会常任理事 山下 裕作

文学会は、文学部の教育と研究を様々な形で支える、学生と教員による互助組織です。今年度は主に、以下の事業を計画・実施しました。

1. 文学部の教育・研究環境整備のための支援金  
配慮学生スペース用施設整備・授業等オンライン対応機材整備・学生貸出用機材整備他、50万円支援
2. 講演会・学会等への支援  
熊本を主会場とする講演会・学会の開催に対し2万円～10万円の支援を計画  
新型コロナウイルス流行のため、現時点(2021.12.6)において支援実績無し
3. 就職活動に対する支援  
  - ①就職情報誌提供事業  
『公務員試験受験ジャーナル』『教員養成セミナー』『就職四季報』等就職情報誌を、希望履修モデルに提供
  - ②就活用写真補助  
学生会員の就職活動を支援するため、履歴書用写真の撮影費を半額補助
  - ③就活におけるコロナ対策支援  
就活面接等でPCR検査が必要とされた場合、検査費用を補助(2,000円/1回)
4. 研修旅行補助  
授業の一環として行われる調査・実習旅行や、各研究室で課外活動として行われる合宿・研修旅行に対する補助(参加学生会員に1人2,000円)
5. 進級記念品  
4年に進級した学生会員に対する記念品(1人4,000円の図書券)
6. 新入生歓迎行事・卒業式関連行事に対する支援  
学科やコース・研究室で行われる新入生歓迎行事・卒業式行事に対して、総額で24万円の支援を計画  
現時点で行事未開催のため、全新入生に記念品を配布し、卒業式支援は計画中

## 永青文庫研究センター活動報告

永青文庫研究センター専任准教授 今村 直樹

2020年度に続き、本年度もコロナ禍の深刻な影響を受けることとなったが、そのなかでも当センターは、以下の意欲的な活動を実施することができた。

まず、永青文庫資料に基づく研究活動では、①今村直樹専任教員が共編者となり、稻葉継陽センター長も執筆した論文集『熊本藩からみた日本近世—比較藩研究の提起—』(2021年8月)、②第2期永青文庫叢書(全5巻刊行予定)の第4巻目にあたり、稻葉センター長・今村専任教員が編集を担当した史料集『細川家文書 地域行政編』(2022年2月)が刊行された。研究紀要『永青文庫研究』の第5号も、2022年3月に刊行予定である。基礎研究では、松井家文書と古閑家文書の総目録作成事業を継続し、着実な進展がみられた。今村専任教員を研究代表者とする『熊本藩関係貴重資料群』の総合的解析による日本近世の意思決定構造の実証的研究(基盤研究(B))では、オンラインの研究会を3回開催した。

社会貢献活動でも、オンライン面での発信が強化された。三澤純兼任教員と今村専任教員が担当した附属図書館貴重資料展「廃藩置県と熊本藩」

および第15回永青文庫セミナー、後藤典子研究員と稻葉センター長が報告等を行ったYouTube名古屋城調査研究報告「史料が語る 名古屋城石垣普請の現場」は、いずれもWeb上で公開され、多くの反響を得た。新史料の発見に基づくプレスリリースも活発に行われた。また、コロナ禍が落ち着きをみた2021年秋には、対面式の講演会も再開され、当センタースタッフが多く講師を務めた。



▲オンライン貴重資料展「廃藩置県と熊本藩」

### 7. 図書整備費

学生用図書充実のため、今年度は文学科とコミュニケーション情報学科に対して、それぞれ15万円の補助

### 8. 留学のための語学試験補助

留学する際に必要な語学試験に対する補助(1人5,000円まで)を計画  
新型コロナウイルス流行のため、現時点での支援実績無し

### 9. 学生の学術交流に対する支援

学生が中心となって企画・運営する他大学との学術交流への支援  
今年度、支援実績なし

### 10. 学生用コピー機の維持管理

### 11. 「文学部通信」に対する補助

『文学部通信』の発行費用、ならびに保護者の方々への郵送費を負担

これら事業は、会員(学生と教員)の会費によってまかなわれ、文学部の教育・研究活動に広く還元されるものです。未加入の学生と教員の方も、文学会の活動の趣旨をご理解いただき、ご加入をお願いいたします。今後も、みなさまのご理解とご協力をいただけるよう努力して参ります。文学会を宜しくお願いいたします。

## 文学部通信 第21号

2022年3月1日

発行: 熊本大学文学部/熊本大学文学会  
編集: 熊本大学文学部 広報・情報化推進委員会

松浦雄介、米島万有子、中川順子、日高愛子、日高利泰

ウェブサイト [www.let.kumamoto-u.ac.jp](http://www.let.kumamoto-u.ac.jp)

